

【論文】

戦争の時代における無教会運動

—石原兵永—

黒川 知文

はじめに

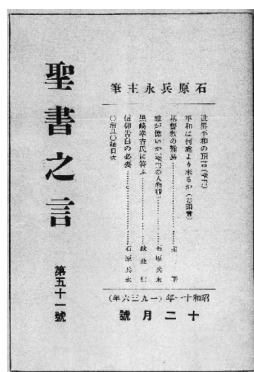
「若者たちは、なぜ今、自分が死ななければならないのか、何のために死ぬのか、という問いを抱きつつ教会をも訪ねたのです。いのちがけで求道したのです。そして洗礼を受けて戦地に赴く若者が何人もいたのです。もちろん牧師は、国家のために死ぬことを積極的に評価することはありませんでした。・・・祈りの席で学生たちが、戦争に行きたくないと訴えました。牧師夫人アイナ先生の国の兵士を殺したくないと涙声で訴えました。なぜひとを殺さなければならないのですか、と牧師に問い詰めました。気がつくと、牧師は席を外し、部屋の隅の椅子にうずくまったまま、何も言いませんでした。答えを失って祈るよりほかない牧師の姿がここに刻まれました。・・・しかし、戦争のさなかでも教会は伝道を止めませんでした」¹

1929年にハルピンに生れ、10代を戦争の時代の東京で過ごした加藤常昭は教会から戦場に向かうクリスチャン学生の姿について、以上のように描写している。「なぜ人を殺さなければならないのか」という疑問を持ったまま戦場に向かう者がいたこと、また、戦争の時にも、教会は伝道をやめなかったことに注目したい。

アジア・太平洋戦争の時代において、無教会運動の指導者はどのような言説を雑誌において表明していたのであろうか。

戦争の時代における無教会運動の指導者の四人目として、石原兵永（1895-1984 年）をとりあげる。

石原は栃木県河内郡篠井村の農家の六男として生まれた。青山師範予科に入学して内村鑑三聖書研究会に出席し、青山学院英文科を卒業して教員になった。26 歳の時に信仰を持ち、34 歳から内村の助手として『聖書之研究』編集に従事した。内村の死後に独立伝道者となり、東京市荻窪の自宅で石原聖書研究会を開いた。1932 年以降、『聖書之言』を刊行したが、非戦論の内容のために 1944 年 6 月に廃刊を強いられた。本稿の史料として『聖書之言』の内容を分析する。



1 天皇崇敬

石原においても天皇は特別の存在であった。1934 年 12 月 23 日における日嗣の御子（現上皇陛下）の誕生に関する文章において、天皇は「世界を照らすべき旭日」「世界平和を冀はるる其の大君」だと述べている。そして、以下の様に、日嗣の御子の誕生は、神が暗黒の日本を捨てていないことを意味し、日露の外交関係を緩和したとさえ述べている。石原にとり天皇は神の次に位置し崇敬する存在であったことが分かる。

皇太子殿下の御誕生：天すみわたり、世界を照らすべき旭日が、其の名も太平洋の朝なぎの海を離れてさし昇る頃、日出づる国と称へらるる日本国の、そして世界平和を冀はるる其の大君の、皇太子は生れられたのである。…神は未だ暗黒の日本国を棄て給はぬ様に見える。²

編集雑感：皇太子殿下の御誕生の為か、…日露の外交関係が幾分でも緩和された様に感ぜられるのは喜ばしい。³

2 絶対的非戦論

石原の絶対的非戦論は、1941年に真珠湾攻撃を契機として太平洋戦争が開始されるまでは継続して主張されている。

満州事変は1931年9月18日の柳条湖事件を契機に開始され翌1932年1月28日には上海事件が起きた。この時、石原は、日本国の天職は、「世界平和の実現の為に尽す事、之がまた日本の真の使命でなければならぬ」と述べ、さらに世界平和の基礎については、「我ら日本国民に最も相応はしきもの、其が世界の光明と平和である」⁴と論じる。このように、「世界平和の実現」が日本の使命であり、日本国民は「世界平和の基礎」を造るのに最も相応しいと論じている。(傍線石原)

1936年に勃発した二二六事件の日には、石原は、「我らキリストを信ずる者としては、国民と共にその罪を認めて神の赦しを乞ふと共に、真心を以て国の為に、殊に重大なる時局に当面する為政者の為に祈らねばなりません」⁵と、キリスト者はその罪を認めて神に赦しを求め、為政者のために祈らなければならないと論じている。また、二二六事件は人間の罪によるものと理解していることが分かる。

1936年は、ムッソリーニ政権によるイタリアのエチオピア侵攻事件の翌年にあたるが、石原はアウグスティヌスと同様に二つの国、すなわち、「神の国」とそれと相いれない「此世の国」を設定して以下の様に述べている。

神の国と此世の国：(イタリアのエチオピア侵略) 神の国と相容れない此世の国が、其自身の中に於て相互に分れ争う国となりました。…此世の国に挑戦しない福音は、其は味を失った塩、光の消えた燈台であります。…誤られた「日本の基督教」が其の一例であります。彼等は極端なる国民至上主義の熱心なる支持者、弁護者たるを己が使命と考へてゐるのであります。それでありますから戦争はしない方が国を亡さぬのみか、国を榮へしめるのであります。世界を征服する国は愛と柔和を武器とする国

であります。⁶

石原によると、「神の国」は、「愛と柔和」を武器として世界を征服する国であり、「此世の国」は、「極端な国民至上主義」で戦争をする国である。そして、福音はこの世の塩と光として、「此世の国」に挑戦しなければならないと主張している。「あなたがたは地の塩です。もし塩が塩気をなくしたら、何によって塩気をつけるのでしょうか。もう何の役にも立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけです。あなたがたは世の光です。山の上にある町は隠れることができません。また、明かりをともして灯の下に置いたりしません。燭台の上に置きます。そうすれば、家にいるすべての人を照らします。このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせなさい。人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようになるためです（マタイ福音書5章13-16節）」とのイエスの言葉が石原の教えの背景にある。

さらに世界平和についての石原の主張は、旧約聖書の「主は国々の間をさばき、多くの民族に判決を下す。彼らはその剣を鋤に、その槍を鎌に打ち直す。国は国に向かって剣を上げず、もう戦うことを学ばない」（イザヤ2章4節）と、「主は切なる願いを聞き主は私の祈りを受け入れられる。私の敵がみな恥を見ひどく恐れおののきますように。彼らが退き恥を見ますように。瞬く間に」（詩篇6篇9-10節）を引用して、「平和は何處より来るか：却て今や戦争の声は、全世界の陸と海と空とに満ちたのである。…平和は地より生れず、天より臨む」⁷と論じる。また内村鑑三の非戦の精神に関する言説を引用して、「絶対平和の理想」また、「絶対愛の要求」を示しているとして、「凡ゆる悪と暴虐とを無条件にゆるす所の戦争が、絶対に之と相容れぬことは明かである」⁸と論じている。

1937年7月7日の盧溝橋事件を契機に日中戦争が開始された。同年12月のクリスマスにおいて石原は平和が恢復される希望を以下のように述べている。

非常時とクリスマス：平和な今日ほど、平和を必要とする時代はない。…若しかかる時代に、平和の福音を信ずる基督信者が之を迎えず、平和の為に備へを為すことをしないならば誰が之をなすべきか。…1937 年を送る：我らは一日も早く時局が収拾され平和の恢復を願はざるを得ない。⁹

1939 年は、3 月に宗教団体法が衆議院で可決され成立し、5 月にノモンハン事件、12 月には朝鮮総督府が朝鮮人に対して創氏改名を強制している。同年の朝鮮における教会に対する迫害事件を知り、石原は「朝鮮に於ける基督教界一般の事情について聞き、真に同情にたえなかった」¹⁰と、朝鮮の教会に同情している。

翌年 2 月には、すでに太平洋戦争は開始されているが、それにもかかわらず、石原は、ローマ教皇ピオ 12 世のクリスマス演説を紹介して、キリストによる新秩序建設の機運を以下の様に紹介している。

世界新秩序に不可欠なる基礎：(昨年の暮れのローマ法王ピオ 12 世のクリスマス演説) 活けるキリストの霊の働くところ…真に永続的な新秩序建設のために起き上がる機運は熟するであらう。¹¹

南洋伝道点描 石原生：今尚ほ太平洋上、大小無数の島々の間には、…、伝道船が航行してゐる。之は英国の子供達の祈りと、献金によつて建造されたものである。美しいではないか。¹²

新秩序とは何かは不明であるが、ローマ教皇の演説を引用したこと、また、敵国である英国の子供たちの南洋伝道における献金を「美しい」と述べていることに注目したい。

3 日本の基督教

石原は、「欧米の基督教は世界大戦に屈したるが故に今日の悲境に陥りつつあるのである」¹³と、欧米のキリスト教は「今日の悲境に陥りつつある」

と断じている。また、鈴木虎秋の「日本人の信仰」と題する文章を掲載して、「ドイツ教、アメリカ教ならざる、ナザレ人の生粋な福音が直接に日本人の心を捕へる時に、真の日本的基督教が此の愛する国土に実を結ぶのではあるまいか。¹⁴」と、「日本人の心を捕え」日本の「国土に実を結ぶ」日本的基督教を設定している。ただし、日本的基督教は、「此世の国」に福音により挑戦しなければならないと石原は以下の様に論じている。

此世の国に挑戦しない福音は、其は味を失った塩、光の消えた燈台であります。…誤られた「日本的基督教」が其の一例であります。彼等は極端なる国民至上主義の熱心なる支持者、弁護者たるを己が使命と考へてゐるのであります。¹⁵

4 ナチス・ドイツ、ヒトラー批判

1934年8月19日にドイツにおいて、ヒトラーは総統の正当性を問う国民投票を行い、投票率95.7%のうち89.9%が賛成票であった。ヒトラーは、1935年にはドイツ人の「血と名誉を守る法」であるニュルンベルク法を実施してユダヤ人迫害を開始する。1936年3月のドイツ総選挙によりナチス党は99%を獲得し、国民所得は42%増加し、ベルリンオリンピックが開催された。1938年には「水晶の夜事件」と呼ばれる全国的、組織的なユダヤ人迫害が行われ、同年にはオーストリアとチェコスロバキアがドイツに併合された。

そして、1939年にはユダヤ人絶滅を示唆するヒトラーの演説があり、9月にドイツ軍はポーランドに侵攻して、第二次世界大戦が開始された。石原はこの間から1941年にかけてのヒトラーのナチス政権によるユダヤ人や他国民に対する残虐行為を厳しく批判しナチス政権は「暴力をもって蹂躪する者」「神を離れる」ものとされている。日本はドイツと1936年11月に日独防共協定に調印し、1940年9月には日独伊三国同盟を締結した。石原は、それにもかかわらず、以下の様にナチス政権を厳しく非難している。

同信の友に寄す（年頭の感）：現代に於ても、ヒトラー治下の独逸に於ては、幾十万のユダヤ人が、ただユダヤ人であるといふ丈けの理由で、凡ゆる職場と生活とを奪はれ、或は国内を漂浪し、或は国外に放逐さるる有様であるといひます。¹⁶

荻窪通信：9月1日（ヒトラー、ポーランド侵略し、第二の世界動乱の火蓋がきられた）言ふべからざる悲惨の運命が人類を待つことだけは確かである。9月10日（ソ連軍ポーランド進駐）赤坊の弱い手が両方から大きな手でねぢられるのではなからうか。…ポーランドは滅びることあるともポーランド魂は永遠に滅びないと言ふ駐日波蘭使臣の言は悲壮である。¹⁷

荻窪通信：4月10日（水）（ドイツ軍のデンマーク、ノルウェー侵入）己が利益の為に、暴力をもつて之を蹂躪する者は禍ひなるかな。…神の正しき審判をまぬがれ得ないであらう。¹⁸

レメクの歌：（ドイツ軍によるフランス人の報復銃殺事件 10月26日朝日夕刊）レメクの時代より今日迄、過去数千年間に於て人類は果してどれだけの進歩をしたか。然し神を離れる時我らは此処まで堕ちゆかねばならぬ。¹⁹

ナチス政権のドイツによるユダヤ人迫害、ポーランド、デンマーク、ノルウェーへの侵攻、フランス詩人への報復銃殺事件を批判し、神の審判を免れられないと厳しく断じている。

5 クリスチャンの戦争参加

日独防共協定に調印された1936年において、石原は「非常時局」に直面しても、クリスチャンは福音を信じるべきことを以下のように述べている。

非常時局と基督教：非常時局に直面して基督信者のとるべき態度は、まづ何よりも基督教の真面目を明かにすることが第一であると信ずる。……凡ての人々がキリストの福音を信じ得る為には、たとえ我ら自身はどうなつ

でもよい。我らは喜んで同胞に対する此の喜ばしき義務—喜ばしき特権を有ちたいと思ふ者である。²⁰

翌年9月には、石原は招集を受けた友人である野村実を世田谷の野戦銃砲兵隊に訪ねている。²¹

また1940年には、南京に旅行した荻窪集會會員Cの報告を以下の様に掲載した。

荻窪通信：学生として今夏南京に旅し、惨たる戦跡を目のあたり見た。この土の上に自分と同年輩の青年が如何に多く血を流したのか。もし之が万一聖戦でなかつたとしたら、さう思つて強く心を打たれ、大なる責任を痛感した。(C)²²

「万一聖戦でなかったら、大なる責任を感じた」とあるように、石原も聖戦論に立つと考えられる。

さらに同年、ヨーロッパ戦線において、敵国同士である英国とドイツの戦勝祈祷の内容が、いづれも神の祝福を求めていることから、石原は「然らば何處に間違ひがあるのか。…それを断定するのはただ公平にして真実に在す神のみである」²³と、信仰的な疑問を発している。

石原が戦争に参加することを積極的に表明するのは、1941年12月8日の真珠湾奇襲以降であった。

荻窪通信 12月8日（月）：朝突如として日本と米国及び英国とは西太平洋に於いて戦争状態に入つたとの驚くべき報知に接した。…実に重大事が始つたのである。12月14日（日）晴。：すぐる一週間は時局の事に心奪われなかなか落ち着いて仕事が出来なかつた。然し今日は思ひ切つて自分の職場に立ち帰る決心をして大久保の集會に出かけた。…全き愛と信頼との

支配するキリストの国と、裏切をその本性とするサタンの国が、これほど際立って相対立している箇所は聖書の中で稀である。之について語りつつ私は実に深い感動を禁じ得なかった。²⁴

石原は「キリストの国」と「サタンの国」と二つの国を設定して、「全き愛と信頼」との支配するキリストの国と、「裏切」をその本性とするサタンの国が、これほど際立って相対立している箇所は聖書の中で稀である」と述べ、日本を「キリストの国」として、聖戦論に転じたと推定される。

さらに、クリスチャンは「一命をなげうって」戦争に参加することを以下のように述べている。

悔いなきの生活：全世界が戦ひのさ中にある今の世に、一身の安全をのみ求めて生くることは何人にもゆるされない。いはんや自己に死して神に生きんと志す基督者にもまた、一命をなげうつてなほ悔いなきの生活がなくてはならない。²⁵

このように、真珠湾奇襲以来の日本軍の戦勝状況が大きく石原の絶対的平和論を聖戦論に変化させたと考えられる。同時に、「この激変の中にあつて、昨日も今日も永遠までも変り給はぬ基督と、其の福音とに対する確信を動かすことなく、今日まで生きぬき、生きのびる事を許された事は、たしかに神の恩恵であり、奇跡であると思ふ」²⁶と、戦火における神の恩恵についても述べている。

6 クリスチャン学徒のための壮行会

1942年6月5日のミッドウェー海戦により、戦局は日本に不利になっていく。だが大本営は事実を国民に知らせず、日本の勝利を発表していく。1943年2月には日本軍がガダルカナル島から撤退し、6月25日には学徒戦時動員体制確立要綱が決定して、10月21日には、東京神宮外苑競技場で出

陣学徒壮行会が挙行された。石原の指導する荻窪集会からも、学生が入隊することになった。

出陣学徒壮行会の翌月 11 月 21 日に、5 人のクリスチャン学徒のための壮行会が石原集会において開催された。高山知之、畔上知時、西田潔、秋野新一、石原茂幸の 5 人である。「菊薫る」快晴の日に、28 人の会員が弁当を持参して荻窪の石原宅に集まった。

石原宅の聖書之言社の門において撮影されたこの日の記念写真には、5 人の出陣する学生の列中央に笑顔の石原がいる。5 人の学生のうち 3 人は笑顔であるが石原の両脇の西川清と畔上知時は、微笑もしくは無表情である。(写真参照) 学生の複雑な心境が表れていることがわかる。

戦地に向かったクリスチャン学生はどのように戦争を考えていたのであろうか。



写真：石原集会における出陣学徒壮行会（1943 年 11 月 21 日）

戦地に向かう5人の学生の感想を聞いて、石原は「年若き彼らがすでに、日本男子として、又信仰に生くるものとしての立派な心構に立てるを知り、深く胸うたれた」と述べている。

確かに、一人の学生は、「後に来る正しき世界疑はず命ささげん数ならぬ身の」と詠んだ。だが、この学生は、「後に来る正しき世界」と詠み、戦争後の世界が正しいとされていて、現在の戦争が正しくないと自覚していると思われる。だがそれを知っていても、将来の正しい世界のために戦争で命をささげる、というのがこの学生の意識であることがわかる。

他の学生は、以下の様にクリスチャンとして戦争に参加する内面的な苦悩を語っている。

軍隊に入つたならば、軍人になり切ってしまはなければなりません。…私達にはそれに打勝つ自信はありませんが、しかし私達は既に神の支配の下に置かれてゐると云ふこの信仰だけが私達をはげましてくれると思ひます。…私達は肉体に於ても、信仰に於ても、今や決戦すべく運命づけられて居ります。祖国日本、私達は何と云つても日本を愛します。日本が本当に正しい国であるやうに、そのためには私達青年の血が流される位のことは何程のことでもありません。しかし、私達のやうに銃を手にして祖国のために戦ふ者が愛国者か、或は隠れて黙々として日本が本当に神の道を歩まんために力をつくす者が真の愛国者か、私達はそのどちらが真に茨の道かよくわかります。信仰を抱いて死ぬといふことよりも、信仰を抱いて生き抜くと云ふことの方がどれほど困難なものかを私達はよく知つています。しかし、すべては神の欲し給ふままになつてゆくのです。²⁷

日本人として日本が正しい国であり、日本を愛している。だが、行くべき道には二つしかない。「銃を手にして祖国のために戦ふ」か「隠れて黙々として日本が本当に神の道を歩まんために力をつくす」か。この学生は前者を選んだ。「信仰を抱いて死ぬといふ」というのはクリスチャンとして戦争に

参加して死ぬことである。「信仰を抱いて生き抜く」とは、クリスチャンとして絶対的平和論を保持して戦争参加を拒否することである。クリスチャンとして戦争を拒否して生き抜くことの方が「どれほど困難なものか」を彼は知っていた。これが当時の戦争下における日本のクリスチャンの状況であったと考えられる。

戦争を拒否すれば、当局からの厳しい処罰があった。軍隊に入隊して戦闘を拒否すれば軍法会議によって有罪とされ処刑される。入隊を拒否すれば厳しい罰則があった。たしかに信仰を抱いて兵役を拒否して生き抜くことはほとんど不可能であった。彼は、この二者択一の道において、信仰をもって戦争に参加することを決意したのである。これは決して自発的な戦争参加ではない。また決して積極的な戦争参加ではなかったことは明らかである。「神の支配の下に置かれてゐると云ふこの信仰だけが私達をはげましてくれる」とあるように、矛盾に満ちた現状だが、神への信仰は確かであるから、この学生は、そのことにのみ慰めを見出していると考えられる。

石原は、「わが家のイサクたる茂幸（慶應予科二年）も、今日送別される一人であつた」と述べた後に、「今や祖国重大の秋に召をうけ、謹んで彼を再び国と神とに捧げまつる次第である」と結んでいる。戦争という国家的危機において、戦争に参加することは「神に捧げる」ことだと石原は理解していることがわかる。

5人の学徒があかしをして、この集会後に、何人か残ってレコードでシュヴァイツァーのパイプオルガン曲を聴いた。そして参加者は学徒のために寄せ書きをしている。

7 大東亜共栄圏のキリスト教化

戦争の時期に石原が最も多く述べたのは、「欧米に代わって、日本がキリスト教国になって、東洋に、そして世界に平和を実現していく」という言説である。

1937年に盧溝橋事件により日中戦争が開始された後、石原は以下のよう

に、日本の使命は「東洋を平和の地と為し、世界の平和と人類の幸福に、新たなる光明を齎すべき任務」にあるとし、「我ら日本国民が此の光榮を担ふ者たらん事を」と呼びかけている。

東洋の地を嗣ぐ者：東洋八億の民の中、此の光榮を担ふ者は誰か。願ふ、我ら日本国民が此の光榮を 担ふ者たらん事を……日本国の使命：東洋を平和の地と為し、世界の平和と人類の幸福に、新たなる光明を齎すべき任務を、まづ第一に担ふべきは日本国民でなければならぬ。…九千万の日本国民と、四億の中国の民が協力して東洋に平和の基を据えたならば、混沌たる世界にとり絶大なる「東洋の光」となるに相違ない。²⁸

日本国民精神の精髓：神が日本国民の心に、かかる高貴なる精神（自己をすてて義勇公に奉ずるの精神）を植ゑ付け給ひし事を深く感謝せざるを得ない。この犠牲的精神は、…東洋民族に迄及ばねばならぬ。世界と全人類とに迄及ばねばならぬ。神と其の栄光迄を目的とせねばならない。…茲に我ら日本国民の重大なる責任が存する。…我らは神が日本国民に與へ給ふた靈の光即ち義勇公の精神、犠牲的精神、愛の精神を消すことなく、その光の預言する日本の将来即ち正義と真理に叶ひて世界に此の愛を実現するとの日本の使命を輕蔑すべきではない。²⁹

1938年4月1日には国家総動員法が公布され、11月3日には、近衛首相が東亜新秩序建設を声明した。

『聖書之言』には、以下の様に、大東亜共栄圏の建設が日本の使命だと述べられている。さらに、日本伝道に加えて、「支那伝道も南洋伝道も勿論神より日本人に授けられた光榮ある使命である」とされている。

今後に於て日本が本当に東亜新秩序の為に貢献し得る為には、彼等が支那に於て為した以上の事が出来ねばならぬ事だけはたしかである。…日本は今、新東亜建設という巨大な仕事に手をつけてゐるのである。之はどんな

に困難であつても是非、日本国民の手によつて果たされねばならぬ立場におかれている。…とにかく此の観念（東亜新秩序の建設）が現代日本人の心を強く捕へている事だけは事実である。…支那伝道も南洋伝道も勿論神より日本人に授けられた光栄ある使命であるが、更に緊急を要するものは日本人自身の伝道であると思ふ。³⁰

1941年に太平洋戦争が開始され、1942年には、フィリピンとシンガポールを日本軍は占領し、英国軍に勝利した。同年に、石原は、「大東亜共栄圏は東亜だけでは完成されず、世界共栄圏の建設をめざしてはじめて達成し得るのだ」と世界共栄圏の構想を以下の様に述べる。

荻窪通信：9月20日（日）（集会では濱田成徳「南方と基督教」講演）まことに暗示深い講演をきいた。いふところの大東亜の建設が之を実地について見るときにはいかに困難であるかが痛感される。しかも大東亜共栄圏は東亜だけでは完成されず、世界共栄圏の建設をめざしてはじめて達成し得るのだと思ふ。キリストの福音に生きる我らの前途にも実に大きな問題がまつてゐるのである。³¹

日曜集会の記3 聖書研究会有志 1月3日（千葉県鳴濱にて）：その（今回の戦ひ）目的とする處は、…功利主義、個人主義的の旧秩序にかはるに全体の共栄を理想とするいはゆる全体主義的の新秩序建設にありとなす。しかもこの建設戦に於て、日本は東亜における指導者的の立場に立ちその運動の歴史的な中心地となつてゐる。…世界精神と歴史的必然が、日本をこの地位に引出したのであり、日本がこの建設に着手したことは、…世界精神が日本に与えた至上命令とも解される。…この意味で日本は今、否応なしに世界史的の使命をになつて立上がつた、と云ふのである。…かかる世界観を身に体した民族にしてはじめて、世界に本当の新秩序を建設すべき使命をになひ得るわけである。かく考へる時、この問題について最も大きな光を与へてくれるものが、聖書に示された「神の国」である。即ち愛の

共同体の理念として見た神の国の理想である。…今や共栄圏の建設といふ事がいはれる。何によつて共栄の実はあがるか。それは「己の如く其の隣人を愛する」ところの神の国の原理によつて実現されるであらう。³²

日本に東亜共栄圏を建設する指導的役割があることは、「世界精神」であり、また「歴史的必然」であり、東亜共栄圏は聖書に示された「神の国」であると石原は考えていることが分かる。

1944年になると日本は敗色濃い状況になる。だが国民一般は言論統制と大本営による日本に有利な情報のために、勝利を信じていたと推定される。

日本が東亜共栄圏の盟主であるのは、以下の様に、日本が「世界史再進行開始の起点となるべき職分を担ふ」国であり、日本には「神から与えられた特別に宗教的信仰的な特性といふことに土台がある」とさえ論じている。

日本の将来（中）：今日も日本は東亜共栄圏の盟主であるといふことが言はれてをりますが、アメリカは自分が世界の指導者たることを始めから当然の義務と考へてゐるのであります。³³

（内村鑑三『日本の天職』）一は日本国の世界史上における位置と、二は日本国民の神から与えられた特別に宗教的信仰的な特性といふことに土台があるのであります。…日本に於いてそれ（基督教）がより高き段階に止揚せられて純粹且つ充実せる精神となりて（他との混合ではなく）、日本を起点として東方西方に還流を開始し、還流を終りし時に赤道以南に南下を開始し、斯くて全地を神の霊が蔽ふに至りてこの地の創造されし目的が達せられるといふ、日本国が世界史再進行開始の起点となるべき職分を担ふといふ考へがその一であります。また日本国民が…「信仰そのものを信ずる信仰」を有つことのできる「精神的宗教的民族」であるといふのがその二であります。³⁴

8 神の国運動批判

賀川豊彦による神の国運動は、1930年に開始され1932年に終わるが、その後も2年間の延長が決議される。だが、満州事変以後の非常的体制の圧力のもとに教育伝道になり終焉していった。石原は、東亜共栄圏を「神の国」と考えるが、賀川豊彦の「神の国」とは異なると論じる。石原は、「神の国」は霊的なものであるとする立場から、賀川による神の国運動を、以下の様に批判した。

神の国とその建設：世に所謂神の国運動なるものがあるが、単に社会を基督教化せんとする運動をそのまま神の国の建設と同一視するは勿論大なる誤りである。…神の国は、人の靈魂の中に行はれる神の直接の御支配である。³⁵

石原にとり「神の国」は、人間の努力ではなくて、「罪の赦しと信仰、神はこの原則によつて我らの中に神の国を立て給ふのである」³⁶

9 伝道への情熱

真珠湾奇襲により太平洋戦争が勃発した時、石原は、新たな戦争に勝利することよりも、「愛する祖国の救ひの為に我を要すとならば、勿論喜んでこの一命をささげる。…キリストの福音こそ、人を救ひ、国を救ひ、また世界を全うするの道である」³⁷と、福音伝道こそ世界を救うものであると述べた。石原の伝道への情熱が確認できる。

さらに当局の圧力により1944年6月に『聖書之言』が廃刊になった時に、「終刊の辞」において以下の様に、述べている。

終刊の辞：(本号を以て終刊) これは当局の方針として、切迫せる時局下用紙の激減出版印刷資材不如意の折柄此際かかる個人雑誌を一様に廃刊

する、との決定によつたものであり、誠にやむを得なかつた次第であります。…昭和7年10月本誌が創刊されて以来今日までまさに11年8ヶ月、号を重ねること140、今終刊に際し歩みし跡をかへり見て感慨まことに深きものがあります。…最初に本誌の刊行を思ひ立つた目的は、神の言なる聖書を愛する祖国の同胞に伝へ、其中心たるイエスキリストの十字架による罪の赦しの福音を宣ぶるにあつたのであります。³⁸

石原は、『聖書之言』刊行の目的は「神の言なる聖書を愛する祖国の同胞に伝へ、其中心たるイエスキリストの十字架による罪の赦しの福音を宣ぶるにあつた」と言明している。伝道への情熱は、石原においては一貫していたことがわかる。

10 結論—整理と課題

アジア・太平洋戦争の時代において、石原兵永が表明した言説から、以下の4点が結論として挙げられる。

- 1 平和への希求と伝道への情熱は、戦争が開始されても一貫していた。
- 2 日本の使命は大東亜共栄圏、さらには世界共栄圏の創設にあり、それが「神の国」となるように伝道しなければならないと説いた。
- 3 クリスマンは、神のために一身をなげうって戦争に参加しなければならないと教えた。
- 4 矛盾に満ちた現実を知りながらも消極的に戦争に参加するクリスマン学生もいた。

今後の研究課題として、第1に、応召されたクリスマン学生の戦争への態度をさらに分析すること、第2に、大東亜共栄圏と賀川豊彦による「神の国」との概念の比較考察をすることが挙げられる。

注

- 1 加藤常昭『自伝的伝道論』キリスト新聞社 2017年 21頁。
- 2 『聖書之言』、第16号（1934年1月）2頁。なお、引用文中の傍線は著者の強調点（原著では傍点）である。
- 3 『聖書之言』、第18号（1934年3月）22頁。
- 4 『聖書之言』、第16号（1934年1月）3頁。
- 5 『聖書之言』、第42号（1936年3月）25頁。
- 6 『聖書之言』、第45号（1936年6月）3-11頁。
- 7 『聖書之言』、第51号（1936年12月）巻頭。
- 8 『聖書之言』、第54号（1937年3月）1頁。
- 9 『聖書之言』、第63号（1937年12月）2頁。
- 10 『聖書之言』、第77号（1939年2月）28頁。
- 11 『聖書之言』、第101号（1941年2月）巻頭。
- 12 同、44頁。
- 13 『聖書之言』、第27号（1934年12月）11頁。
- 14 『聖書之言』、第24号（1935年3月）。
- 15 『聖書之言』、第45号（1936年6月）5頁。
- 16 『聖書之言』、第40号（1936年1月）2頁。
- 17 『聖書之言』、第85号（1939年10月）28頁。
- 18 『聖書之言』、第92号（1940年5月）24頁。
- 19 『聖書之言』、第109号（1941年11月）23頁。
- 20 『聖書之言』、第62号（1936年11月）1-3頁。
- 21 『聖書之言』、第61号（1937年10月）27頁。
- 22 『聖書之言』、第88号（1940年1月）25頁。
- 23 『聖書之言』、第93号（1940年6月）4頁。
- 24 『聖書之言』、第111号（1942年1月）22頁。
- 25 『聖書之言』、第111号（1942年1月）1頁。
- 26 『聖書之言』、第113号（1942年3月）71頁。
- 27 『聖書之言』、第132号（1943年10月）19-20頁。
- 28 『聖書之言』、第61号（1937年10月）1-2頁。
- 29 『聖書之言』、第64号（1938年1月）7-8頁。
- 30 『聖書之言』、第86号（1939年11月）24頁。
- 31 『聖書之言』、第120号（1942年10月）24頁。
- 32 『聖書之言』、第124号（1942年2月）12頁。
- 33 『聖書之言』、第139号（1944年5月）2頁。

34 同、7 頁。

35 『聖書之言』、第 80 号（1939 年 5 月）2-3 頁。

36 同、6 頁。

37 『聖書之言』、第 110 号（1941 年 12 月）1 頁。

38 『聖書之言』、第 140 号（1944 年 6 月）1 頁。

Non-Church Movement during the War Period
—Hyoei Ishihara—

Tomobumi KUROKAWA

ABSTRACT

From comments made by Hyoei Ishihara in the time of Asia-Pacific War, the following four points can be noted:

1. His longing for peace and passion for mission work remained unchanged even after the war began.
2. The mission of Japan is to establish the Greater East-Asia Coprosperity Sphere, and further, the World Coprosperity Sphere. Mission work should be promoted so that the Prosperity Sphere become the “Kingdom of God.”
3. Christians should devote ourselves and participate in the war for God.
4. Being aware of the reality filled with contradictions, there were some Christian students who reluctantly took part in the war.

The future research subjects are, first, to analyze the attitudes of Christian students who were called up, and, second, to consider the Greater East-Asia Coprosperity Sphere in comparison with the “Kingdom of God.” by Toyohiko Kagawa